

『全唐詩』中の「臨刑・臨化」詩

後藤 秋 正

唐・五代における「臨終詩」及び「臨刑詩」としては、
崔玄亮「臨終詩」(『全唐詩』卷四六六)、薛準「臨終詩」
〔『全唐詩』卷七一五)、江為「臨刑詩」(『全唐詩』卷七四
一)、顔令寶「臨終召客」(『全唐詩』卷八〇二)などがあ
る。中でも江為の詩は、わが国の大津皇子の「臨終」詩と
の関連からこれまでもしばしば論じられてきた。また、こ
れらの「臨終詩」と「臨刑詩」については、拙論¹⁾において
も論じたことがある。しかし、詳細に見るならば、『全唐
詩』に収録される、死に臨んで制作したとされる詩はこれ
らのみにとどまらない。それは次のようなものである。

- ① 陳 璿 「臨刑詩」 (『全唐詩』卷七三二)
- ② 鄭 頊 「臨刑詩」 (『全唐詩』卷七三三)
- ③ 陳寡言 「臨化示弟子」 (『全唐詩』卷八五二)

④ 楊 損 「臨刑賦」 (『全唐詩』卷八六三)
⑤ 王氏女 「臨化絕句」 (『全唐詩』卷八六三)
このうち鄭頊(釈智命)は、隋末の混乱期に鄭帝と自称
した王世充に、その諫言ぶりと出家したことが忌まれ、
武徳二年(六一八)に斬刑に処せられており、実質的には
隋代の人である。その「臨刑詩」は『統高僧伝』本伝に見
え、『古詩紀』卷百二十八、逯欽立『先秦漢魏晉南北朝
詩』隋詩、卷十などに収録されている。³⁾
従つて本稿においては、鄭頊の詩を除く他の詩の出典を
確認しつつ、これら今まで論じられることのなかつた四篇
の詩の性格について考えてみたい。

二

まず、陳璿の詩を取り上げよう。陳璿の経歴と詩は、
唐・皇甫枚撰『三水小牘』卷下に見えており、これを典拠

とする『太平広記』卷三百五十三、鬼三十八、陳璠の条の記載とは若干の異同がある。ここでは『三水小牘』から引用するが、長くなるので、陳璠が沛（江蘇省沛県）に戻ったのち、留後と称した時浦が許さなかつたのにもかかわらず、奸計を用いて武寧軍節度使の支詳とその一族を殺戮する部分は省略する。

陳璠者、沛中之卒徒也。与故徐帥時浦、少結軍中兄弟之好。及浦為支詳所任、璠亦累遷右職。黃巢之乱、支詳簡勦卒五千人、命浦總之而西、璠為次將。浦自許昌趨洛下、璠以千人反平陰。浦乃矯称支命、追兵廻。於是引師与璠合、屠平陰、掠圃田而下。……其後浦受朝命、乃表璠為宿州太守。璠性儻酷喜殺、復厚斂淫刑、百姓嗟怨。五年中、貲賄山積。浦惡之、乃命都将張友代璠。璠怒、不受命。友至、処別第、以俟璠出。璠夜率鬣俊五百余人誑友。遲明、友自領驍果百余人突之。璠潰、与十余騎走出数十里、從騎皆亡。璠棄其馬微服乞食於野。野人有識之者、執以送郡。友擊之、往白浦。浦命斬之於郡。璠本羸憚木朴、不知書。臨刑、忽索筆賦詩曰、積玉堆金官又崇、禍來倏忽變成空、五年榮貴今何在、不異南柯一夢中。時以為鬼代作也。

陳璠は、沛中の卒徒なり。故の徐の帥の時浦と、少く

して軍中兄弟の好みを結ぶ。浦 支詳の任ずる所と為るに及び、璠も亦右職に累遷す。黄巢の乱に、支 辟して勦卒五千人を簡び、浦に命じて之を総べて西せしめ、璠を次將と為す。浦 許昌より洛下に趨り、璠 千人を以て平陰に反す。浦 乃ち支の命と矯り称し、兵を追いて廻る。是に於いて師を引いて璠と合し、平陰を屠り、圃田を掠めて下る。……其の後 浦 朝命を受け、乃ち表して璠を宿州太守と為す。璠 性儻酷にして殺すを喜び、復た斂を厚くして刑を淫にし、百姓 嗟怨す。五年の中、貲賄 山積す。浦 之を惡み、乃ち都將の張友に命じて、璠に代えんとす。璠 怒り、命を受けず。友 至りて、別第に処り、以て璠の出づるを俟つ。璠 夜 鬣俊五百余人を率いて友を誑む。遲明、友 自ら驍果なる百余人を領して之を突く。璠 潰え、十余騎と走り出づること数十里、從騎 皆な亡げ、璠 其の馬を棄てて微服し食を野に乞う。野人 之を識る者有り、執えて以て郡に送る。友 之を摯ぎ、往きて浦に白ぐ。浦 命じて之を郡に斬る。璠 本より羸憚にして木朴、書を知らず。刑せらるるに臨んで、忽ち筆を索め詩を賦して曰く、
積玉堆金官又崇 玉を積み金を堆み官も又崇し
禍來倏忽變成空 禍來り倏忽にして變じて空を成す

五年榮貴今何在 五年の榮貴 今何いずくにか在る
不異南柯一夢中 南柯 一夢の中に異ならず
と。時に以て鬼の代作と為すなり。

詩中の「五年」は文中に見えたように、陳璠が宿州（安徽省宿県）の太守であつた期間に当たるが、以下に見るように史実とは若干異なる。

では、この詩にはどのような史実が背景として想定されているのであろうか。『旧唐書』卷百八十二、時溥伝には、時溥と陳璠の關係が以下のように記される。

時溥、彭城人、徐之牙將。黃巢、長安、詔徵天下兵進討。中和二年、武寧軍節度使支詳遣溥与副將陳璠率師五千赴難。行至河陰、軍乱、剽河陰。溥招合撫諭、其衆復集、懼罪、屯于境上。詳遣人迎犒、悉恕之。溥乃移軍向徐州。既入、軍人大呼、推溥為留後、送詳於大彭館。溥大出資裝、遣陳璠援詳歸京。詳宿七里亭、其夜為璠所殺、拳家屠害。溥以璠為宿州刺史、竟以違命殺詳、溥誅璠、又令別將帥軍三千赴難京師。天子還宮、授之節鉞。

時溥は、彭城の人、徐の牙將なり。黃巢、長安に抛り、詔して天下の兵を徵して進討せしむ。中和二年、武寧軍節度使支詳、溥と副將陳璠をして師五千を率いて難に赴かしむ。行くゆく河陰に至らんとして、軍乱れ、河陰県

を剽すめて迴る。溥、招合して撫諭し、其の衆復た集るも、罪を懼れ、境上に屯す。詳、人をして迎えて犒かきらわしめ、悉く之を恕す。溥は乃ち軍を移して徐州に向かう。既に入れば、軍人、大いに呼よびび、溥を推して留後と為さんとす。詳を大彭館に送る。溥、大いに資裝を出だし、陳璠をして詳を援けて京に帰らしめんとす。詳、七里亭に宿り、其の夜、璠の殺す所と為り、家を挙げて屠害せらる。溥を以て宿州刺史と為さんとするも、竟に命に違ひて詳を殺すを以て、溥、璠を誅し、又別將をして軍三千を帥しんいて難に京師に赴かしむ。天子、宮に還り、之に節鉞を授く。

これによれば、陳璠が誅殺されたのは中和二年（八八二）のことと考えられるが、時溥が支詳を追放した時期について、『旧唐書』卷十九下、僖宗本紀の広明元年（八八〇）の条は九月のことであるとし、『新唐書』卷九、僖宗本紀は八月のこととしていて、月は異なるものの、いずれも広明元年のこととしている。『三水小牘』の逸話は、「詩」を除いて、ある程度は史実を踏まえたものになっているが、陳璠は実際に五年間宿州刺史であつたわけではなく、時溥の命令に反して誅せられるまでのことはすべて広明元年、もしくは中和二年中の出来事であつたようだ。

『新唐書』時溥伝は、以下のよう⁽⁶⁾に、陳璠が誅殺されるに至る経緯をより簡潔に記している。

溥厚具貲裝、遣璠護還京師、夜駐七里亭、璠擅殺詳、屠其家。溥怒、署璠宿州刺史、俄殺之。別遣將引銳兵三千入関、僖宗因以武寧節度命之。

溥 厚く貲装を具え、璠をして護りて京師に還らしめんとするに、夜 七里亭に駐まるや、璠 擅に詳を殺し、其の家を屠る。溥 怒り、璠を宿州刺史に署せんとすも、俄に之を殺す。別に將をして銳兵三千を引いて関に入らしめ、僖宗 因りて武寧節度を以て之に命ず。

この詩は『三水小牘』が「鬼の代作」かと記しているように、文字を知らなかったという陳璠の作かどうかは大いに疑問が残る。仮に陳璠の詩であるとすれば、これが詠じられた中和二年、あるいは広明元年といえ、唐王朝は大混乱に陥っていた。黄巢の軍が長安を陥落させたのは広明元年十二月、僖宗が成都に着いたのは明くる中和元年正月のことである。当時の情況について、例えば『旧唐書』卷百七十九、蕭遘伝は、次のように言っている。

光啓初、王綱不振。是時天下諸侯、半出群盜、強弱相噬、怙衆邀寵、國法莫能制。

光啓（八八五―八八八）の初め、王綱 振るわず。是

の時 天下の諸侯は、半ば群盜より出で、強弱 相い噬み、衆を怙みて寵を邀め、國法 能く制する莫し。

従つて、陳璠の詩も、晩唐の混乱期に幸運をつかみそこねた一軍人の作品、もしくは陳璠に仮託した作品として読むべきものであろう。

三

次に陳寡言の詩を見よう。陳寡言について『全唐詩』卷八百五十二の小伝は、以下のように述べている。

陳寡言、字太初、暨陽人。從田良逸學道、元和中住桐柏山。詩二首。

陳寡言、字は太初、暨陽の人なり。田良逸に従いて道を学び、元和中 桐柏山に住む。詩二首。

この記述は、唐・趙璘撰『因話錄』卷四、角部に見える記事と、宋・陳耆卿撰『嘉定赤城志』卷三十五、人物門四道の条に見える記事とに基づいて考えると考えられる。前者には次のように言う。

元和初、南岳道士田良逸・蔣含弘皆道業絶高、遠近欽敬、時号田・蔣。……桐柏山陳寡言・徐靈府・馮雲翼三人、皆田之弟子也。……陳・徐在東南、品第比田・蔣、而馮在歐陽之列。

元和の初め、南岳の道士田良逸・蔣含弘は皆な道業絶だ高く、遠近 欽敬し、時に田・蔣と号す。……桐柏山の陳寡言・徐靈府・馮雲翼の三人は、皆な田の弟子なり。……陳・徐は東南に在りて、品第は田・蔣に比し、馮は歐陽の列に在り。

桐柏山は浙江省天台県の西北にある山。景雲二年に桐柏観（一名、崇道観）が建てられた。また、後者には次のように言う。

陳寡言、越人、字太初。初隱玉霄、号曰華琳、以詩咏自娛。其山居詩云、……。臨化以詩別其徒。

陳寡言は、越の人、字は太初。初め玉霄に隠れ、号して華琳と曰い、詩咏を以て自ら娛しむ。其の山居詩に云う、……。化するに臨んで詩を以て其の徒に別る。

『嘉定赤城志』は、彼が遷化するに際して「詩」を作つたと云っているが、詩は引かない。『全唐詩』に「臨化示弟子」として載せる詩は次のようなものである。

我本無形暫有形 我 本と形無きに暫らく形有り

偶來人世逐營營 偶たま人世に來りて逐うこと營營たり

輪迴債負今還畢 輪迴の債負 今還し畢り

搔首憊然掃上清 首を搔きて憊然として上清に帰る

この詩には仏家と道家の語が混在している。「輪迴」が

六道輪迴を言うことは間違いない。「上清」は道家の、いわゆる「三清境」の一であり、『雲笈七籤』卷三、道教本始部の「道教三洞宗元」に、「其三清境者、玉清・上清・太清是也。亦名三天。其三天者、清微天・禹余天・大赤天是也。……靈寶君治在上清境、即禹余天也。」（其れ三清境とは、玉清・上清・太清是れなり。亦三天と名づく。其れ三天とは、清微天・禹余天・大赤天是れなり。……靈寶君の治は上清境に在り、即ち禹余天なり。）とある。「搔首」は物思いにふけるさまを言うようだが、「憊然」の語が物事にとらわれないゆつたりしたさまを言うことからすると、詩全体としては、俗世を去つて清境に帰する淡淡とした心境が詠じられていると言えよう。

四

次に『全唐詩』が楊損の作として載せる「臨刑賦」を見よう。楊損の伝は『旧唐書』卷百七十六と『新唐書』卷百七十四にある。『新唐書』のそれを見ておこう。

損字子默、絳蔭補藍田尉、至殿中侍御史。……陝虢軍

乱、逐覲察使崔萇、命損代之、至則尽誅有罪者。拜平盧

節度使、徙天平、未赴復留、卒官下。

損 字は子默は、蔭に繇りて藍田の尉に補せられ、殿

中侍御史に至る。……陝虢の軍乱れ、觀察使崔蕘を逐い、損に命じて之に代えしむるに、至れば則ちことごと尽く罪有る者を誅す。平盧節度使に拜せられ、天平に徙うつされんとするも、未だ赴かずして復た留り、官下に卒す。

楊損が没する前後の記事は、『旧唐書』もほぼ同様である。楊損に関する逸話は、このほか『唐語林』巻七、『御覽唐闕史』下などにも見えているが、いずれも彼が刑死するに至る状況は全くうかがわれぬ。楊損は、実は楊勛の誤りである。楊勛の逸話は宋人の撰になる『新編分門古今類事』⁹に見えている。¹⁰

楊勛者、前蜀後主乾徳中、世号楊僕射、不知何処人、变化無常。為後主召群仙於薰風殿、刑部侍郎潘嬌奏其妖怪、帝命武士於西市戮之。随刃化為草、人未至行法処、僕射吟詩曰、聖主何曾識仲都、可憐社稷在須臾、市西便是神仙窟、何必乘槎汎五湖。其年冬、後主失国、果如其言、此亦可以知興廢之有前定也。

楊勛は、前蜀の後主の乾徳中、世に楊僕射と号するも、何処の人なるかを知らず、変化して常無し。後主の為に群仙を薰風殿に召さんとするに、刑部侍郎潘嬌、其の妖怪なるを奏し、帝、武士に命じて西市に於いて之を戮ころさしめんとす。刃に随いて化して草と為り、人の未だ法を

行うに至らざる処に、僕射、詩を吟じて曰く、

聖主何曾識仲都、聖主、何ぞ曾て仲都を識らんや

可憐社稷在須臾、憐むべし社稷は須臾に在り

市西便是神仙窟、市西は便ち是れ神仙の窟

何必乘槎汎五湖、何ぞ必ずしも槎に乗りて五湖に汎か

ばん

と。其の年の冬、後主、国を失うこと、果たして其の言の如し、此れ亦以て興廢の前定有るを知るべきなり。

この話柄は前蜀の後主・王衍の乾徳年間（九一九—九二四）のこととして記録されている。詩を見てみよう。「仲都」は、王仲都。前漢・元帝の時代の漢中の方士で、どんな寒暑にも耐えることができたという。例えば、嵇康「答難養生論」に、「仲都冬裸而体温、夏裘而身涼、桓譚謂偶耐寒暑。」（仲都は冬は裸にして体は温かく、夏は裘きて身は涼し、桓譚謂う偶たま寒暑に耐うと。）など見えている。起句と承句の関連は分かりにくいのが、あなたは、王仲都のような方士の存在を知らなかったのか、そのように無知だから憐れなことに、王朝がまもなく滅びることも分かっているのだ、ということになるか。結局は、春秋時代、范蠡が越王勾踐を助けて呉を滅ぼしたのち、軽舟に乗って五湖に隠れたことを踏まえて、市西で斬られても、そこは

洞府のようなものであつて、わざわざ五湖に行かなくとも
帰隠がかなうことになる、というのである。

五

最後に、王氏の女の「臨化絶句」¹¹とされる詩を見てお
こう。この詩は、『太平広記』卷七十、女仙十五、「王氏
女」の条に見えている。¹² やや長くなるが全文を引く。

王氏女、徽之姪也。父隨兒入闕。徽之時在翰林、王氏
与所生母劉及嫡母裴、寓居常州義興鼎湖洲渚桂巖山。与
洞靈觀相近。王氏自幼不食酒肉。攻詞翰、善琴、好無為
清靜之道。及長、誓志不嫁。常持大洞三十九章・道德章
句。戸室之中、時有異香氣。父母敬異之。一旦小疾。裴
与劉於洞靈觀修齋祈福。是日稍愈、亦同詣洞靈仏像前、
焚香祈祝、及曉婦、坐於門右片石之上、題絶句曰、甌水
登山無足時、諸仙頻下聽吟詩、此心不恋居人世、唯見天
辺双鶴飛。此夕奄然而終。及明、有二鶴棲於庭樹。有仙
衆盈室、覺有異香。遠近驚異、共奔看之。隣人以是白於
湖洲鎮吏詳驗、鶴已飛去、因囚所報者。裴及劉焚香告曰、
汝若得道、却為降鶴、以雪隣人、勿使其濫獲罪也。良久、
双鶴降於庭、旬日又降。葬於桂巖之下、棺輕、但聞香氣
異常。殮棺視之、止衣烏而已。今以桂巖所居為道室。則

乾符元年也。

王氏の女は、徽の姪なり。父 兄に随つて闕に入る。
徽の時に翰林に在るや、王氏は所生の母劉及び嫡母の裴
と、常州義興鼎湖洲渚の桂巖山に寓居す。洞靈觀と相
近し。王氏は幼きより酒肉を食らわず。詞翰を攻め、琴
を善くし、無為清靜の道を好む。長ずるに及び、誓志し
て嫁がず。常に大洞三十九章・道德章句を持す。戸室の
中、時に異なる香氣有り。父母 之を敬異す。一旦 小
疾あり。裴と劉と洞靈觀に修齋して福を祈る。是の日稍
愈え、亦同に洞靈の仏像の前に詣り、香を焚きて祈祝し、
曉に及んで婦るに、門右の片石の上に坐し、絶句を題し
て曰く、

甌水登山無足時 水を甌し山に登るも足る時無し
諸仙頻下聽吟詩 諸仙頻りに下りて詩を吟ずるを聴く
此心不恋居人世 此の心 人世に居るを恋わず
唯見天辺双鶴飛 唯だ見ん天辺に双鶴の飛ぶを
と。此の夕べ奄然として終る。明くるに及んで、二鶴の
庭樹に棲む有り。仙衆の室に盈つる有りて、異香有るを
覺ゆ。遠近 驚異し、共に奔りて之を看る。隣人 是を
以て湖洲の鎮吏に白ぐれば詳驗するに、鶴 已に飛び去
り、因りて報ずる所の者を囚う。裴及び劉は香を焚きて

告げて曰く、汝若し道を得たるものなれば、却つて降鶴と為り、以て隣人を雪ぎ、其れをして濫りに罪を獲しむる勿れと。良久しくして、双鶴庭に降り、旬日にして又降る。桂巖の下に葬るに、棺軽く、但だ香気の常に異なるを聞くのみ。棺を発きて之を視るに、止だ衣烏のみ。今桂巖の居る所を以て道室と為す。則ち乾符元年なり。

王徽（？—八九〇）は京兆の王氏の出であり、『旧唐書』巻百七十八と『新唐書』百八十五にそれぞれ伝がある。これらによれば、彼は大中十一年（八五七）の進士で、懿宗、僖宗、昭宗の三朝に仕え、宰相にまで至っている。しかし、『唐書』には彼の兄とその子に関する記載はない。従つて、彼女とその生母及び嫡母がなぜ常州義興県（江蘇省義興市）にいたのかは分からない。ただ、彼女たちが寓居したという湖嶽渚の桂巖山に近い洞壺観は、義興県の東南、漢の張道陵が住んだという張公洞の付近にあつた道観であり、一名を天申宮とも言った。皇甫冉に五律「宿洞壺観」（『全唐詩』巻二五〇）があつて、その起・頷聯は次のように詠じられている。

孤煙靈洞遠 孤煙 靈洞遠く
積雪滿山寒 積雪 山に満ちて寒し
松柏凌高殿 松柏 高殿を凌ぎ

莓苔封古壇 莓苔 古壇を封ず

彼女たちは道家でいう福地の近くに住んでいたことなる。王氏の女が早くから無為清静の道を好んだというのも、その環境が大いに影響しているであろう。王氏の女は登仙して鶴に化したというのだが、河中少尹馮徽の妻薛氏も、中和二年（八八二）に死んだ際には、詩こそ残してはいないものの、王氏の女と同じような経過をたどつて鶴に化したとされる。このような例からもうかがわれるように、唐代にあつては道教的信仰が士大夫のみならず、婦女の間にも深く浸透していた。果州南充県（四川省南充市の北）の人である謝自然は、幼少から道德経と黄帝内篇を誦して穀物を絶つていたが、徐々に怪異を示し、貞元十年（七九四）に金泉山の道場に入ると群仙が集い随うようになり、翌年十一月二十日の白昼、士女数千人が仰ぎ見の中で昇天した。果州刺史李堅がこのことを上表すると朝廷から詔が下つて褒美され、李堅は「金泉道場碑」を建てたという。昇天を否定するか肯定するかの違いはあるものの、この話柄は当時から多くの人々の関心と呼んだらしい。韓愈は否定的な立場から「謝自然詩」（『全唐詩』巻三三六）を作つて次のように詠じた。

果州南充県 果州 南充県

寒女謝自然 寒女 謝自然

童駮無所識 童駮にして識る所無く

但聞有神仙 但だ神仙有るを聞くのみ

輕生学其術 生を輕んじて其の術を学ばんとし

乃在金泉山 乃ち金泉山に在り

……

噫乎彼寒女 噫乎 彼の寒女

永託異物群 永く異物の群れに託す

感傷遂成詩 感傷して遂に詩を成す

味者宜書紳 味き者 宜しく紳に書すべし

また、元和十五年（八二〇）の進士である施肩吾は「謝

自然升仙」詩（『全唐詩』卷四九四）を詠じ、彼女は「尸

解」したのではなく、「白鶴」に乗って昇天したのだと見

なしている。

分明得道謝自然 分明に道を得たり謝自然

古来漫説尸解仙 古来 漫りに説う尸解の仙と

如花年少一女子 花の如き年少の一女子

身騎白鶴遊青天 身は白鶴に騎りて青天に遊ぶ

このほか、劉商には「謝自然卻還旧居」（『全唐詩』卷三

〇四）が、李翔にも「題金泉山謝自然伝後」（『補全唐詩』

拾遺卷一）がある。謝自然の「昇仙」を詠ずることは、当

時の道教への関心の強さの一端を示しているに過ぎない。

六

以上見てきた詩の中で、刑死するに臨んで作ったとされているのは陳璠「臨刑詩」と楊勛「臨刑賦」である。しかし、陳璠の場合は、史実から考えるならば、彼が「臨刑詩」を残す可能性は極めて少ない。唐が滅んだ天祐四年（九〇七）に成ったとされる『三水小牘』の撰者である皇甫枚が史実をもとにして潤色を加えたものと言えるのではなからうか。『四庫未収書目提要』（『鞏經室外集』卷四）「三水小牘二卷提要」には次のような指摘がある。

唐皇甫枚撰。……枚当旅食汾・晋、而追紀咸通時事、共得上下兩卷。……書中所載、雖涉神仙・靈異之事、而筆雅詞明、實寓垂戒。

唐皇甫枚撰。……枚・晋に旅食するに當つて、咸通の時事を追紀し、共に上下兩卷を得たり。……書中に載する所は、神仙・靈異の事に涉ると雖も、而るに筆は雅にして詞は明らかに、実に垂戒を寓す。

確かに事柄は「靈異」のことに属し、また「臨刑詩」も、世俗の榮華は永続しないという「垂戒」として読むことが可能である。楊勛「臨刑賦」は、妖怪の化身であつた彼の

作った詩が前蜀滅亡の詩譏となつたとされるものである。『新編分門古今類事』が出典とする『洞微志』は既に伝わらない。『分門古今類事』について、『四庫全書総目』巻百四十二、子部、小説家類三は、以下のように述べている。

大旨在徵引故事、以明事有定數、無容妄觀。而又推及於天人迪吉・從逆之所以然。雖採摭叢瑣、不無涉於誕幻、而警發世俗、意頗切至。

大旨は故事を徵引し、以て事に定數有りて、妄觀を容るる無きを明らかにせんとするに在り。而して又推して天人の迪吉・從逆の然る所以に及ぶ。採摭すること叢瑣にして、誕幻に涉ること無くんばあらずと雖も、世俗を警發して、意は頗る切至なり。

たとえ「世俗」を戒めるといふ側面は有していたにしても、この詩も「誕幻」にわたるものと言えよう。陳寡言の「臨化示弟子」の出典は確認できないが、この詩は道家の手になる臨終詩という性格を有していた。王氏の女の「臨化絶句」も、道家的色彩が濃厚なものとなっている。ここに取り上げた詩は、決して一流の文人の手に成つたものではなく、かつ相互の影響関係も認められないものであることも確かであつて、唐詩の広大な世界のごく一部分を構成しているに過ぎない。

従つてここでは、これらの詩が当事者の手によつて実際に書かれたかどうかは大きな問題ではなく、記録に残されたこと自体が、当時の文学的風潮の一端を象徴的に反映するものとなっていることを確認しておきたい。つまり、作品数は多くないにしても、これらの詩の存在は、後漢末期にその萌芽があらわれ、六朝末期になると仏教的世界に近づいていった⁽¹⁶⁾「臨終詩」が、唐代、特にその最末期においては道教的世界に接近し、あるいは道教的世界の一部として取りこまれていったという、唐代の「臨終詩」の推移の様相を示しているのである。

注

(1) 例えば近年では、金文京「従『全唐詩』一首『臨刑詩』談日韓資料在漢学研究上価値」(『中華文史論叢』第六四集、上海古籍出版社、二〇〇〇・一二)は、大津皇子、陳後主、江為以下、計一〇首に及ぶ日韓の「臨刑詩」を取り上げている。

(2) 拙稿「臨終詩」の成立とその展開」(『中國中世の哀傷文学』研文出版、一九九八所収)参照。また、許渾「王可封臨終」(『全唐詩』卷五三八)については、「唐詩中の『臨終』の語をめぐって」(『漢意とは何か』東方書店、二〇〇一所収)で取り上げた。

(3) 拙稿「六朝期の『臨終詩』」(『中国中世の哀傷文学』所収)参照。

(4) 後に見るように、新・旧「唐書」は時溥に作り、それぞれに時溥伝がある。

(5) 抱經堂叢書本「三水小牘」に付された繆荃孫の校補に、「原本、作積玉堆金又崇禍、未幾倏忽變成空。擬広記校改。」(原本は、玉を積み金を堆み又禍を崇くす、未だ幾ならずして倏忽として変じて空を成す、に作る。広記に擬りて校改す。)と云う。

(6) また、「新唐書」卷一八六、陳儒伝には、同姓同名の陳璠について次のような記事が見えている。

〔広明〕二年、宗權遣趙德諱攻〔淮南將〕瓌、……。明年、德諱又至、諸將困于戰、城遂陷、瓌死、人無識者、併尸于井。復州長史陳璠從瓌至江陵、密斷瓌首置囊中、走京師獻之、授安州刺史。

〔広明〕二年(八八一)、宗權 趙德諱をして瓌を攻めしむ、……。明年、德諱 又至り、諸將 戦いに困しみ、城遂に陥ち、瓌 死して、人 識る者無く、尸を井に併つ。復州長史陳璠 瓌に従いて江陵に至り、密かに瓌の首を断ちて囊中に置き、京師に走げて之を献じ、安州刺史を授けらる。

しかしながらこの逸話も、晩唐の混乱期に偶然に得た敵將の首を朝廷に献じて刺史の地位を授かるという僥倖に恵まれた別の「陳璠」が存在したことを示している。

(7) 「唐語林」卷四と「太平広記」卷七六、田良逸・蔣含弘の条にもほぼ同文の記事がある。

(8) 「全唐詩」の詩題は、趙宦光撰「万首唐人絶句」卷四〇に基づくものであろう。

(9) 呉在慶「唐五代文史叢考」(江西人民出版社、一九九五)所収の「名・字考」に、「全唐詩」之楊損与同名字子默者並非一人」という項目があるが、両「唐書」に伝のある楊損と「臨刑賦」の作者の楊損は別人であると指摘するにとまらる。

(10) 引用は、十万卷楼叢書本「蜀本分門新編古今類事」卷二、帝王運兆門下、楊勛吟詩により、同書が「人未至所法処」に作る箇所は四庫全書本に従った。なお、「蜀本分門新編古今類事」は、「洞微志」を出典と云うが、四庫全書本「分門新編古今類事」は、「資仙伝」を出典とすると云う。

(11) 「万首唐人絶句」卷四〇は、「題石上」に作る。

(12) 「太平広記」は、出典を「埔城集仙録」とする。ただし、現行の「埔城集仙録」には聖母元君以下、西河少女までの事跡を記録するものの当該逸話は見当たらない。「四庫全書総目」卷一四七、子部、道家類存目の「埔城集仙録」の項は、以下のように言っている。

埔城集仙録六卷、蜀杜光庭撰。記古今仙女凡三十七人。云埔城者、以女仙統於王母、而王母居埔城也。張君房雲笈七籤所載、与此本互異。然此本前教卷皆襲漢武内伝・

陶弘景真誥之文、真偽蓋不可知。疑君房所錄為原本、而此本為後人雜摭他書砌合成篇。然均一荒唐悠謬之談、真偽亦無足深弁耳。

壩城集仙錄六卷、蜀杜光庭撰。古今の仙女凡て三十七人を記す。壩城と云うは、女仙は王母に統べられ、王母は壩城に居るを以てするなり。張君房の雲笈七籤の載する所は、此の本と互いに異なる。然るに此の本の前数卷は皆な漢武内伝・陶弘景の真誥の文を襲う、真偽は蓋し知るべからず。疑うらくは君房の録する所を原本と為し、此の本は後人他書を雜摭し砌合して篇を成すと為す。然らば均ひとし一く荒唐・悠謬の談にして、真偽も亦深く弁ずるに足ること無きのみ。

なお、「王氏女」の逸話は『雲笈七籤』卷一一四所収の『壩城集仙錄』一〇巻にも見られない。

(13) 『太平広記』卷七〇、薛玄同の条。

(14) 例えば、黄世中『唐詩与道教』（漓江出版社、一九九六）は、「唐代詩人的崇道迷狂」などの章を設けて唐代文学と道教の関係を広汎に取り上げている。

(15) 『太平広記』卷六六に、『集仙錄』を出典とした謝自然の逸話を載せる。

(16) 中唐の崔玄亮（七七一一—八三三）の「臨終詩」が仏教的人生觀に立脚していることは、平野顯照「『臨終詩』論」（大谷大学文芸研究会「文芸論叢」一〇、一九七八）に指摘がある。